

---

# 七英雄物語 5

七英雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七英雄物語5

### 【Zマーク】

Z0535E

### 【作者名】

七英雄

### 【あらすじ】

不安定な状況の異世界バロゲニアガルド。怪しい動きは加速度を増してあらゆる国にも影響する。そして、アーガス国で出会う者達。運命は止まることなく逃れられない事態へと巻き込んでいく。成長する英雄の物語第5弾！

## 第5部 託される意志 プロローグ リアローラ

バロゲニア神殿から派遣されたワイズムは、長旅を経てようやく先日滅亡した孤島の島ゲルニア国へ辿り着いた。

ガルド会議への出席に對しての返事が聞けず、調査したところ、國の人間は全員惨殺されて滅亡していたとの情報が入り、ある程度の情報は入つてはいたが、当時の大神官デスペラードは更に詳しい調査をとワイズムを筆頭に数人で編成を組み派遣の命令を出した。亡くなつた人間の身元確認や供養も含めて後処理がまだまだ必要だと判断したのだつた。

会議が開催される前である。

ワイズムの耳に大神官デスペラードの悲報が届いたのは港から出發する寸前であつた。

ゲルニア国への出発を急遽中止し、すぐにでもバロゲニア神殿へ引き返す選択もあつたが、一度出された命令を覆すような性格ではなかつた。ワイズムは今ある自分の任務を遂行することを選んだのであつた。

船に揺られて数日後。ワイズム調査団はゲルニア国へ到着した。もう静まり返つた近くの村に入つて行つた。無断ではあるが家を借りて宿に使うつもりだつた。

村に1歩足を入れた時に不穏な空気が流れた。

ワイズム達の前に、女が1人立つていた。細く背の高い女で、1つの才能ではないかと思うほどの美貌に、そして妖艶で魅力的な身体にワイズムは目を奪われた。真っ先に思うであらう、警戒、不審、全てが後手にまわつていた。

ワイズムが我に返つた時は遅かつた。彼を残して他の調査団全員の首が飛んでいた。やつと恐怖という感情がワイズムの身体を這い上がつてくる。

青い目をした女は、長い銀色の髪をかきあげて、ワイズムに近づ

いた。意識が無くなるくらいの気持ちのいい香りが漂つ。

女は妖しく微笑んだ。

瞬間。ワイスムの首は自分の胴体と別れを告げていた。

……と気が付いたら、ワイスムは何事もなくその場に立っていた。ワイスムだけではない。殺されたはずの調査団の仲間達も不思議そうに立っている。

だが、ワイスムは理解した。ガタガタを恐怖で身体が震え始めた。仲間達の首に一閃の傷跡が見える。恐らく自分にあるだろう。これがどういうことか簡単に理解できた。

生き返ったのだ。いや。正確には生き返らせたのだ。あの女によつて。

女は驚くワイスムを見てケラケラ笑つた。

「さあ、可愛い奴隸ちゃん。これから楽しい復活劇をみせるわよ」女はワイスム達に言つた。意志とは関係なくワイスム達の足が勝手に動く。

「」の絶望神四天王の一人、リアローラに付いてきてえ  
ワイスムは諦めてその言葉に従つた。

バロゲニア神殿。

8国並ぶ国、今となつてはゲルニア国のように滅亡してしまった国もあるが、8つの国を束ねる中立的な位置に属する神殿。

5年に1度全ての国が集まる会議、ガルド会議の開催する場所でもある。

今回の会議では前代未聞の事件が起こつた。

大神官であるデスペラードが殺害された。暗殺である。

手引きをしたのは、4人いるデスペラードの次男のヴィジヨンズ。それともう1人。8国の内の1国、聖国ドルコルドのマルーン教皇。

この2人が手を組んで、大神官デスペラードを殺害したのであつた。

暗殺者を使って。

事件が起こつた時に持ち上るのは犯人像。その犯人にあげられたのは、末の息子、グリークスだつた。

グリークスが逃走し、父親殺しの汚名をつけられたまま、ルシ亞達と一緒に旅をしている。

ヴィジヨンズへの復讐、父デスペラードの仇を討つために。

グリークスは、静かに機会を待つている。

そんなことはすっかり忘れていたヴィジヨンズは着々と計画を進めている。

デスペラードの代わりに大神官になる。そして、その補佐役の国としてマルーン教皇がいるドルコルド国を指名する。

全ては計画通りに進んでいる。後は、逃げたグリークスの始末。

そして、秘密を知っているかもしない人間の削除。手は打つている。事は間違いないとも簡単に進むはずだ。ヴィジヨンズの野望は目の前まできていた。

「ヴィ、ヴィ、ヴィジョンズ兄さん」

バロゲニア神殿内の部屋で雑務をしていたヴィジョンズの元に3男であるリゾートが入ってきた。彼の癖はすぐにドモる」とだ。

「…どうした？リゾート」

ヴィジョンズは書類を書き止めてリゾートを睨むように見た。鋭い視線にリゾートに緊張が走る。

「あ、あ、あの。ち、ち、父上のことで」

額の汗を拭きながらリゾートは話しお出した。

「父上は死んだ」

ヴィジョンズは冷静に言い放った。この言葉は身内だらうと死んだ人間には興味がないということを思わせるには十分な言葉だった。「い、いや、ち、父上の、そ、そ、葬儀のことや」違和感を感じながらリゾートは続ける。

「…ああ、そうか、そのことか、父上の葬儀の準備だな」

ヴィジョンズはとぼけるように言った。同時に軽く答えた自分に後悔を覚える。全く悲しんでいない素振りに対してもリゾートは疑問を感じないだらうか。長男のボーダーだつたら間違いなく突っ込まれていただろう。リゾートだつたことに安堵する。

「い、い、一体いつ葬儀をすれば、い、い、いいんだ」

「もう少し待て。犯人が捕まつていない。グリークスを…な」

「……」

リゾートの沈黙に妙な感覚を感じ取った。

「なんだ？言いたいことでもあるのか？」

意を決したようにリゾートは口を開いた。

「ほ、ほ、本当に、犯人は、グ、グ、グリークスなのかな？」

「なんだと」

思いも寄らない言葉にヴィジョンズは声を荒げた。

「だ、だ、だつて、息子だぞ？お、お、俺達も含めて。父上の息子が、そ、そんなことするわけ、な、な、ないだらう？！」

父上の息子。

リゾートの悲痛な叫びを聞いても、ヴィジョンズの心は痛まなかつた。その息子である自分が真犯人だとリゾートに告白したら一体どんな顔をするのだろうか。

「…そうだな、確かに信じたくはない。だが、証言がある。暗殺者の賊がグリークスを犯人だと言つたではないか」

「そ、そ、それは…」

……濡れ衣だと後から続きたのでヴィジョンズは無理矢理止めた。

「とにかくだ。グリークスを捕まえてからわかることだ。その時になつてじっくり話を聞こうではないか」

捕まる指示などしていいない。殺すように指示をしている。そんなことはリゾートには言えるわけがない。

「リゾート。もう休め。あまり考えすぎるんじゃない

「…う、う、うん」

リゾートは何か言いたそうであつたが、押し止めて部屋から出て行つた。

ふう、ヒヴィジョンズは溜息をついた。次なる手を打たなければならぬ。恐らくリゾートは同じような疑問を長男のボーダーに相談するはずだ。

ボーダーはどう思うのだろうか。リゾートに同調するのか、もしくはグリークスを犯人と見るのが…。

いざれにしても障害となるのであれば……手を打つしかない。

ヴィジョンズは目を閉じた。そして、少しだけの眠りへと落ちていつた。

つづく

医療大国ルキボル国。

つい前まで王位継承の戦争を繰り返していた国。国王が死に、残された3人の王子が我こそはと戦争を始めた。

結果、長男のミストラスが戦死し、元々王位継承に無関心だった次男オークランドが国王となつた。3男のズッケルアは一時的ではあるが牢へ入れられている。

王となつたオークランドは現在ルシア達と旅を共にしている。留守となつた国は、ペツチエルという老騎士が仕切つている。内乱が落ち着いた今、ルキボル国は平和な毎日が蘇りつつあつた。

それでも日夜の警戒は解くことはない。

内乱が終結してから、ルキボル国へ入国する国境では、念のために入国する者達を確認している。

外部の者がこの状況に乗じて攻めてくる可能性があるかもしれないからだ。

夜。

兵士は2人。イノーリとヒフスは毎晩のように国境の前に立つていた。来るはずもない敵を待つている。

イノーリは大きく背伸びをした。ヒフスも大きく欠伸をする。

「今日も…何事もなし…と」

イノーリはいつものように言った。

「あ……そうだな…」

ヒフスもいつものように答えた。

2人のこのやり取りは毎日続いている。

「じゃあ…交替で見張りをするか」

イノーリが言いながらヒフスを見た。

そこに。

ヒフスはいなかつた。

「え？」

いや、正確には『ヒフスの首』がなかつた。

鮮血が飛び、返り血がイノーリの顔にかかる。

飛んだヒフスの首は曲線を描いて地面にドサツと落ちる。

「なつ、ななな」

混乱がイノーリの脳を支配する。何が起こっているのか理解出来なかつた。あまりの突然のこと、そして危機管理のなさが生んだ混乱だつた。それもそのはず戦争には召集されたが戦場には出でていない。イノーリに瞬時に判断させることなど無理な話だつたのだ。

そこにこの国の甘さが出た。警戒しているフリで、実際は敵など来ないと油断していたのだつた。

だが、内乱が終わり、国自身も疲れているその時こそ、狙われる時だといつことに気付かなかつたのだ。

「そつ、そんな、ヒフス！」

イノーリは転げ落ちたヒフスの首、崩れ落ちる首のないヒフスの身体を見ながら叫んだ。

「……くすくす」

何処からか笑い声が聞こえた。

イノーリはビクッとして辺りを見回した。

そこには、赤い服を着た女の子が、いた。

茶色の長い髪と空のよう青い目が妙に合つてゐる。

この場には絶対的に似合わない者だつた。

「……え？」

イノーリは拍子抜けした声を出した。しかし、あつという間に戦慄が走る。

女の子の手が服の色と同じくらい真っ赤に染まつていたからだ。

「くすくす…お兄ちゃん…驚いた…？」

嬉しそうに女の子が笑みを浮かべる。

「まさか…き…君が…」

「あたしの名前はプシンって言ひの」

「こじりとプシンと名乗つた女の子は言った。

「このルキボルって国を…潰しにきたの」

「…は？」

プシンは笑みを浮かべたまま指先に少し力を入れた。指先から光が発されたかと思うと光はイノーリを襲つた。

イノーリの意識はここで永遠に途切れ。首と身体に別れを告げた。

「くすくす…」

プシンの笑顔はなくなることがなく、そのままルキボル国へ入つていった。

「マルーン様喜んでもらえるかな」

機嫌良くプシンはルキボル国を潰すために乗り込んでいった。聖國ドルコルドの王マルーン教皇の名前を呼びながら。

プシンの後に軍隊が付いていった。絶望の獣、絶望獣ジャムの軍隊。

「また…この国に来ることになるとはな…」

絶望獣ジャムを率いるのは絶望神四天王の一人、獣使いのヌアリス。以前ルキボル国へ來ていたことがある。

「ちょっとヌアちゃん、あたしがやるんだからね、邪魔しないでよ」

プシンが怒つた口調で言つた。

ヌアリスは鼻で笑つた。

「ふつ…ああ…邪魔はしない。好きなようにやれ、プシン」

「くすくす…ありがとー」

それを聞いてプシンはますます笑つた。

つづく

第5部 第1章 忍び寄る脅威 その3（前書き）

時間がかりすみません。

ルキボル国の国境でイノーリとヒフスの無残な遺体が発見されたことにより、城は恐怖と驚きと不安に包まれた。

新たなる敵の出現。国内での戦争がようやく終結し、身も心も疲れ果てていた国の兵士達には衝撃の事実となつた。今度は国外からの侵入者なのだ。

中には国がもうオシマイだという絶望視する声も出て収集がつかなくなつてゐる。

城を、国を、ルキボル国王オークランドから任されている老騎士ペッチャエルもその一人だつた。

確かに今の状況では、指揮する者はペッチャエルしかいない。しかし、年老いたペッチャエルに国をまとめあげる力は無かつた。本人も自覚している。

オークランドのような若くて魅力のある人望もない。オークランドはここにはいない。我が國の王は自分の使命のために今も何処かで戦つてゐる。

オークランドの代りを立てるしかないとペッチャエルは判断した。それも同じ王の血を引く者を。

ペッチャエルは重々しい独房の扉を開けた。そこには、男が静かに坐禅を組んでいた。

ペッチャエルは大きくその男に向けて膝をついた。

「貴方の助けが必要です。力を貸しください。不在である国王オークランドの代わりとして」

ペッチャエルは言った。

男の目が優しく光る。彼の目に過去の野望に満ちた輝きは感じられなかつた。まるで別人のようでもあつた。

「それは…命令か? ペッチャエル…」

男は口を開いた。

「王の命令です」

ペッチャエルはしつかりとした口調で力強く答えた。決してテタラメではない。

「わかった」

男は立ち上がった。

「我が兄オーランドの命ならば、従うしかあるまい。何があつた。状況を説明せよ」

ペッチャエルも立ち上がり、外部からの侵入者がいることを説明した。

「わかった。ガルヌも呼ぶことは出来るか？ペッチャエル」

「今は、貴方が指揮官です、ズッケルア。貴方の命令に対応しますよう」

オーランドの弟、かつて政権争いで戦争を犯した男、ズッケルア。戦争が終わる際に独房へ入れられていた男、ズッケルア。

国のために、兄オーランドのため、生まれ変わったズッケルアは新たなる希望の意志を持つて、自らの足で独房から踏み出した。

た。

「お久しぶりです。ズッケルア様」

同じくズッケルアの配下として指揮をしていたガルヌも同様に独房から出されていた。ズッケルアの願いである。右腕として、相談役としていたガルヌはズッケルアにとつてはかかせない人材であった。

城の中核。会議の間。

「ああ、久しぶりだ、ガルヌ。懐かしんでいる暇はない。早速だが、今の事態をなんとかせねばな」

ズッケルアは深刻な表情で言った。

「兄から貰つたこの命、無駄には出来ない。必ず国を守るぞ。これまでのズッケルアとは違つ頼もしさをガルヌは感じた。咳払いをしながらガルヌはペッチャエルの方へ向き直つた。

「現場での状況は？」

「うむ。イノーリとヒフスの死体があり、軍隊だと思われる足跡が多数…それも普通の足跡ではなく、まるで獣のような跡だったのだが」

ペッチャエルの報告を聞いてガルヌは手を顎にやり考え込んだ。

「それほどの軍隊なのに、未だ誰も気づかないのはどういう訳だ?」

ズッケルアの言葉にガルヌが答える。

「恐らく、我が国の地理に詳しい者がいるかもしません。隠れようと思えばいくらでも隠れることが出来ます。先の政権争いの中で大打撃を受けた町や村もあるわけですから、もしかしたらそいつた中に紛れ込んでいるのかも…」

「或いは、もう既に襲われるかもしれませんのう…」

不安そうにペッチャエルが言った。

「そうですね、その村や町の人々が全滅していたのであれば、その危機を知らせる者など存在しませんからね」

ガルヌはペッチャエルに同意した。

「わかつた。まずは全ての町村の安全を確かめるぞ。早急に偵察を出すんだ。1人では行かせるな。必ず2人以上の隊を組ませるのだ」

「はつ…」

ズッケルアの指示にガルヌとペッチャエルは素早く動いた。

1人になつたズッケルアは窓の外を見る。

「兄さん…」

ズッケルアは静かに呟いた。

ペッチャエルの不安は的中していた。

真っ赤な服を着た女の子プシンと、絶望獣ジャム率いる絶望神四天王又アリスは既にある村を襲つていた。

殺戮。生き残りは誰もない。着々と城へ向けて進んでいる。

「くすくす…かんたあ〜ん、全然歯ごたえないわねえ」

返り血を全身に浴びたプシンは無邪気に笑う。笑顔だけを見れば  
その風貌通りの幼い女の子だ。

だが実際は村人全員を殺害した狂氣の幼い女の子。絶望獣の力は  
借りず、殺しを楽しんでいる。

「ヌアちゃん、そろそろ？ねえ、お城はそろそろかなあ？」

プシンの問いかけに、ヌアリスは振り返る。

「ああ、そろそろだ」

「やつたあ！ 楽しみだなあ。もつと、もつといつぱい殺せ〜」  
嬉しそうにプシンは不気味に笑う。

がさつ。

物音。

ヌアリスとプシンの視線が鋭く動く。

「ひつひいいい」

兵士が2人恐怖で腰を抜かし倒れこんでいた。

ズッケルアの命令で様子を見に来ていた兵士だった。

「わあああああ〜」

プシンは玩具を見るよつた目で兵士を見つめた。

「あつ、あわわわ」

兵士達は必死で逃げようとする。この絶望な事実を伝えに戻らね  
ば。

「きやははは〜、マテマテマテ〜」

プシンは兵士に襲いかかった。

兵士の目の前が、ぶつん、と真っ暗になつた。

つづく

「偵察が1組帰つてこない」

ガルヌが言つた。

「ズッケルア様」

ガルヌはズッケルアの方へ振り返つた。

帰つてこない1組は城から一番近く、そして正面に位置する方向だつた。それが何を意味するのか、敵は正面から、更には目と鼻の先まで近づいていることがわかる。

頷いたズッケルアは覚悟を決めたのか口を開いた。

「…来るぞ。敵は正面からくる。ペツチエル、戦闘態勢をとれ、兵士を正面に集中せよ!」

「はっ」

ペツチエルは返事になると指示をしに行動を始めた。

「余程の自信があるのですね、正面からなんて」

ガルヌが考え込みながら言つ。

「うむ、何者で、何の目的なのかもわからぬ。兄がいない時というのも計算通りなのかもしねりないな」

ズッケルアも同意した。

「しかし、かといって我が国を脅かす者は誰だろうと許すわけにはいかない。まして一時的にでも国を預かる立場が弱気になつてゐる場合ではない」

力強くズッケルアは言つた。その言葉に強く重い責任感のある気持ちが込められていた。

しばらくして、ペツチエル指揮の下、兵士達が城正面へ集められた。時間もそんなにかかるはず兵たちの素早い動きにペツチエルの統率力の高さがわかる。

正門を完全に閉め切り、戦闘態勢は整つた。

「準備ができたようですね、ズッケルア様」

「ああ、戦場での指示はペツチエルに任せたる、我々は状況を把握し、全体的に的確な指示を出さねばならない、頼むぞ、ガルヌよ」

「全員静かに待機せよ」

ペツチエルの命令に従う兵達。辺りはシンツと静寂が漂う。

... o o o

数々の異常が発現を察知する感覚が目覚めたり

卷之三

卷之二

何かが聞こえる。

全員が貝のようになり口を閉じ、岩のように身体を止めた。

卷之三

ノノノノノノノノ

卷之三

尋常ではない音を感じて、明らかに兵士達の動搖が伝染している。

さを失つていた。

その音はもつと大きくなつてきた。

卷之三

叫  
び

正門が揺れた。

雄叫びと一緒にドオオオンと門へ体当たりをしている音が響く。

ドオオオン。

トオオオシ

何度も何度も繰り返し鳴る。

門に亀裂が入つた。

「落ち着けえええい！ 戦闘準備いいい！」

ペツ チエルが吠えた。

を構える。

門が…。亀裂が広がる。ギシギシ。ビキビキ。

「来るんやおおおおおー。」

門が破壊され、溢れんばかりの生き物が傾れ込んできた。

ニシテ  
二

绝望獣ジャム。

さすがのペッチャールも思考回路が一瞬止まつた。

その一瞬が命取りだった

「...ホークワーナー...」

この言葉がペッセルの最期の言葉となつた。

絶望獣の爪がペッセルの身体を簡単に貫き、他の数体の絶望獣も同時にペッセルを貫いた。捨てられるかのようにペッセルの身体は宙を舞い地面に叩きつけられた。

文字通り一瞬の出来事だった。戦場の指揮官がいとも簡単に葬り去られたのである。兵士の士気などどうやって上げることが出来るのであらうか。

ほとんどの兵士達が叫び、戦意喪失した。容赦なく絶望獸が襲い掛かる。ゲルニア国、バロゲニア神殿に続き、一方的な殺戮が開始された。

「……そんな…馬鹿な」

「なんだ……あの怪物は

驚愕のズッケルアとガルヌ。何もかもが予想外だった。「敵」とはいつも人間ではないなんてわかるはずがない。それも圧倒的な力を持っている。

「……うつ

何もできない。できるわけがない。ズッケルアは真っ青になつていた。

ガルヌも対策を頭の中で巡らせるが、何も浮かんではこなかつた。

「くすくす…」

女の笑い声が聞こえた。

女の子がそこに立っていた。

寒氣がズッケルアの身体を通過する。  
敵。

疑うことなどない。この状況で不敵な笑みで現れるのだ。敵ではなくてなんなのか。

「初めましてえ、あたしブシンって言いま～す」

女の子は名乗りながらズッケルア達に向かつて歩き始めた。

「いきなりだけどお、この国あたしがもらつたよ、くすくす…」

ブシンは人差し指を唇に当てて「ん~」と言いながら考え込む。

「とにかく、まずは全員にい、死んでもらうねえ、うふふ」

ブシンは無邪気に笑つた。その顔がますます不気味に見える。

恐怖と絶望がズッケルアの脳裏に入り込む。

「……オ、オークランド……兄さん…」

ズッケルアは呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0535e/>

---

七英雄物語 5

2010年10月11日02時22分発行